

---

# サモンナイト～ロード・オブ・ナイトメア～

悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サモンナイト〜ロード・オブ・ナイトメア〜

### 【Nコード】

N0676P

### 【作者名】

悠

### 【あらすじ】

ここは霊界サプレスのどこか

二人の悪魔は突如召喚され姿を消した。

向かった先はリンバウム…聖王都。

物語はここから始まる。

筆者2つ目の作品です。

## 魔界より出ずる者ゝ epilogue (前書き)

筆者にとって2作目です。まだまだ不十分な点は多々ありますので  
ご教授宜しくお願いします。

## 魔界より出ずる者 e p i l o g u e

ここは霊界・サプレスのどこか。そこで二人の悪魔が対峙していた。一人は地に膝を着き、肩で息をしていた。良く見てみると全身に傷を負っている様子だ。

またもう一人は息切れはしているものの、大きな傷は目立たずもう一人のモノに比べると余裕の表情を浮かべている。

「俺様の勝ち…だな？バルレル…いや、狂嵐の魔公子よ！」

「くっ、俺が負けただと…？」

地に膝をつけている悪魔はバルレル。「狂嵐の魔公子」と呼ばれるほど強大な力を持ち、周りの悪魔からは恐れられている大悪魔だ。

もう一人のモノは…

「今日は俺の負けにしといてやるが…次は俺様が勝つからな！わかつたか、ユウキ！」

「いいぜ、今度はもつと楽しませてくれよ！」

俺の名前はユウキ。まあ、若そうに見えもするが立派な古参の悪魔だ。グングンと力をつけてきた『狂嵐の魔公子』とはこいつがガキの頃からの付き合いだからなあ。ずっと張り合ってきたし、最高のライバルにして親友ってところかな。ライバルっても勝負して負け

たことはないけどな。

「おい、ユウキ。何をへらへらしてやがる。」

「あ？お前との勝負もたのしいなーっとなあ」

バルレルはちつと舌打ちをして横に転がった。既に受けた傷は治癒を開始始めている。

「けっ、俺にとっては疲れるがな。ただ、俺様とまともにやりあえる奴はお前ぐらいなもんだけどな。」

そう、二人は相手に飢えていたのだ。お互いが強力であるが故に…。

「しっかし、お前さんもどんどん力をつけてきてるな。お兄さんもう、負けちゃいそうだよ。」

「けっ。何いってやがる。そこそこの余力を残していやがるくせによあ。」

「あっ、ばれてた？ほら、そこは経験とか歳の功ってね。」

「ヒヒッ。そうだよなあ？ユウキはおっさんだもんなあ。」

ぐっ、確かに結構生きてるが…おっさんはないだろうよー。

そうやって二人で勝負の後の心地よい空気を感じているところで…俺達の周りの空気が歪んでいくのを感じた。

「おい！バルレル！これは、まさかっ！？」

「ああ、わかってらあ！こいつぁ…召還だあ！？」

おお、バルレルが段々と召還陣に飲み込まれていつている。こんな大悪魔を召還するだなんて…大層な力を持つてんだなと思っていたら、バルレルの野郎。俺の腕を掴みやがった。こっ、こいつ！もしかして俺まで巻き込むつもりかよっ！？

「っっ！お前何引っ張って！」

「けっ、てめえも道連れだよばあ！っか！」

おまああああ！！と声をあげていく俺の声は響かず…この霊界サプレスから二人の悪魔が姿を消した。

出会い who are you? (前書き)

お久しぶりです。相変わらず短いですが、宜しくお願いします。



出会い who are you??

トリスSIDE

「古き英知の術と我が声によつて今ここに召還の門を開かん…我が魔力に応えて異界より来たれ…新たなる誓約の名の下にトリスが命じる 呼びかけに応えよ…異界のものよ!!」

シュウウウ…ズガン!

魔力がサモナイト石に絡まり…魔力の波動がその場を支配し…爆発の中心点には二人の悪魔がいた。

「……」

「(うまく…え?二人…?しかも子ども!?)」

「ふははは…低級な悪魔を呼び出したようだな。しかも二人とは。能力も低そうだ。」

召喚した二人の護衛獣をみて、フィリップ師範は鼻を鳴らしてそう言われた。うつ、確かに見た目はそうだけでも…。

「…オイ、ニンゲン」

目の前の目つきが悪く、羽の生えた少年がこつちを睨みながら何か言いたそうであった。

「はいはい、何かしらボク」

「ぶははは！お前ボクっていわれてるぞ！ってなんじゃこりゃああ！！俺様の超美しい尻尾と羽があ！？あつ、牙はあった。でも、なんか視界も低い感じがするし！？」

「うるさいぞ、ユウキ。オイニンゲン。よくもこの俺を呼び出しやがったな。高くつくぜこの借りはよお……」

「（あらあら、厄介な子呼んじやつたかしら？）」

片方は羽が生えてる男の子…もう片方は…あれ？人間かしら…？

「おい！おい！バルレル！俺様の、俺様の……」

ユウキって呼ばれた子はなんだか泣いているみたい。バルレルって呼ばれた子は邪魔くさそうにその子みてるけど…

「さて、こうしたお前の下僕は召還された。それでは今から戦闘による試験を行う！」

フリップ師範は大きそうな御腹を揺らして私に向けてそういった。

「ええ？そんな事聞いてませんよ。」

「お前と戦うのはこの者どもだ」

こいつ…聞いてないわね。

「いいぜ、俺は今メチャむかついてるんだ。八つ当たりをさせても

らうぜえ？」

「お？お？やんの？バトル？バトル？つか武器ねーじゃん！素手か？素手で戦えってか！？」

二人の悪魔君はやる気満々…。ちよつとユウキって子のテンションが高い気もするけども。二人は壁にかけてあつた獲物を持ち始めた。バルレルは槍をユウキは片手剣を2本持つ。

「オイ、ニンゲン。手え出すなよ！？ユウキ、どちらが多く狩れるか勝負だ！」

私を残して二人の悪魔君達は駆け出し始めた。

バルレルの槍は鋭く、ダークジェルを軽々と貫いた。また、ユウキの二振りの剣は十字の弧線を描き、ダークジェルは一瞬にして4つに分解された。私も彼らに負けずと混じってダークジェルと戦った。数分後には私達以外には何も存在していなかった。

「ちいつ。八つ当たりにもなりやしないぜ！あーっ、イラつく！」

「まあ、俺達の手にかかりやこんな奴ら余裕だつてさ。つか、この剣振りづらいなあ。刀はないのか！？」

「（血気盛んな子達ねえ…）」

その後、フリップ師範に認められ、私は青の派閥の一員と認められた。外に出るとネスが私を待っていてくれたのか待機していた。声に出すと、そんな事はないといってきたが。その後、ラウル師範に召

還獣の事についていわれるまで、私は彼らの事を忘れてしまっていた。

「あんた達お疲れ様。それにしても見かけによらず結構つよいわねえ？」

「あんな雑魚共にやられる俺様達じゃないわなあ。俺の自慢の羽と尻尾が無くなってるけど…」

「ユウキは黙ってやがれ！つか、しつこいぞ！おいニンゲン。何主人面してやがる…とつと俺達を解放しやがれ！」

「むー、いつてくれるわねえ。」

「誓約されてやがるから仕方なく命令だけは聞いてやがるが…俺はお前と仲良くするつもりなんてないからな！覚えとけっ！」

「おいおい、そんな邪険にすんなって。ごめんなあ、トリスちゃん。こいつ短気だからさあ。まあ、照れ隠しみたいなもんだと思って聞いてあげてよ！ガハハハハ！」

「一々ウルサインだよユウキは！」

「（こいつら仲いいのねえ。）」

こいつらの会話見てるとたのしいわねえ。と思ってたらノックの音が聞こえた。ネスがフリップ師範が呼んでる事を伝えに来てくれた。私への御用達は…各地を転々と回り、青の派閥の召還師としてふさわしい行動をする事。期限は無く、目標もなし。あはは、これは追放同然だわね。ラウル師範はなんとか食いついてくれているけど…

これ以上迷惑をかけられない。私はそれを受け入れ、旅支度を始めに部屋へ戻った。

旅立ち? } going my way! } (前書き)

こちらでもお久しぶりです。生きてます。あけおめです！  
ネギまの方に比べるとかなり更新頻度は遅いですが、頑張っ  
て最後まで書いていきます。

旅立ち? } going my way! }

いつて。朝起きたら俺様の屋敷のベッドじゃなかった。そういえば昨日バルレルに巻き込まれて召還されちまったんだっけ。俺様の隣でグース力寝てるバルレルを見ているとイラッ と来たので鳩尾目掛けて腕を振り下ろしてやった。ぐえっ! というカエルが潰されたような音が聞こえたが無視した。悪魔の怒りはおそろしいんだからね!

それにしても、俺様達のような能力の高い悪魔を呼び出すとは…あのトリスって子もすげえ力をもってるのかな。まあ、誓約のせいで俺達超弱体化してるけどね。自慢の尻尾とか羽も無くなってるし…。

隣で気絶しているバルレルを放っておいて朝日を浴びているとトリスちゃんが入って来た。

「あれ、ユウキは起きてたんだ。バルレルは…なんか口から泡吹いてるけど?」

「さてねえ。どこかでぶつけたんじゃないかなあ? ケケケ」

「まあ、いいわ。さて、あんたらも用意しなさい。そろそろ出発よ!」

どうやら、この嬢ちゃん。仲間から良く思われてないらしい。あの太ったおっさんから心地イイ気配がぶんぶんしてたからなあ。人間って奴は尊敬できるぜ。あんなどす黒い感情を平気で持つてるんだからなあ。

「何よ、何ニヤニヤしてんのよ?」

トリスちゃんが怪訝そうな目でこっちを見ていた。まあ、護衛の為に呼ばれたんだし…しっかり守ってやろうとしますかねえ。

「いんや、なんでもないんよ。んじゃ、コイツ起こしてからいくから先にいっててよ。」

「ふうん。まあ、わかったわ。早くしてね?」

そういつてトリスちゃんは去っていった。さて、バルレルの奴を起こすとしてしょうかね。

「つつうー…おい、ユウキ!てめえよくもやりやがったな!」

隣でブツクサ怒っているバルレルを無視してトリスちゃんの横にいる男 ネステイ の話を聞く。どうやらこの街の案内をしている様子。ん、あっちの方にいい場所が…。

「なあ、トリスちゃん。向こうの方にもいつてみよーや。」

「え?別にいいけど…。ネス、あっちの方には何があるの?」

「ああ、あっちの方は…」

ネステイ  
眼鏡は歩きながら話をしてくれている。ほう、貴族街とな。隣のバルレルは不機嫌だった顔を直し、この付近に集まる邪気に大層ご満



足しているようだ。俺も、心地よい空気を感じついニヤニヤしてしまふ。

「何よあんた達。そんなニヤニヤして。」

「ここはいい所だな。」

「へえ、あんた達もこういう屋敷に住みたいの？」

「ここらには邪気が集まっているぜ。ヒビツ、人間のこういう所は尊敬できるぜ。」

「はあ…ほら、もういくわよ。」

バルレルがもうちょっとここにいさせろ！と文句をあげるがトリスちゃんはさっさと先にいってしまう。全く、悪魔心のわからないご主人だ事。

「さて、それじゃあ。そろそろ出発しようとしようか。」

眼鏡がトリスちゃんにそう聞いている。そんなもん、今までのトリスちゃんの傾向を見てたら…。

「え？ネスが考えてくれてるんじゃないの？」

そらきた。流石は我らがご主人。期待を裏切らないぜ。

「君は馬鹿か！？なんで僕が考えなければいけないんだ。これは君の使命なんだ。あくまで僕は監視役として着いていくだけだぞ？当然、全ての決定権は君にあるんだ。もつとも、余りにも無茶な事な

らば止めるけどな。」

「んー。目的地ねえ…とりあえず北にでも行きましようか。」

「北？どうしてわざわざ人気のない所に行こうとするんだ？」

「え、えーっと…」

トリスちゃん、明らかに適当に答えただろ…。隣にいるバルレルなんて欠伸して聞いてやがる。一応俺らにも関係ある事なんだぞ？

「はあ。その様子だとどうせ何も考えてないのだろう？全く、それぐらいは事前に調べておくものだ。とりあえず南だ。ファナンへ向かうぞ。君についていっただどこに連れていかれるかわかったものじゃないな…。」

全くもって眼鏡ネステイのいう通りだが…それはそれでおもしろいと思う。やはり生きてる限り楽しまないといけない。俺ら悪魔だしなつ。この子についていけば楽しくなりそうだな。

町を出て街道を歩く俺たち。俺とトリスちゃんは辺りをきよろきよろしながら歩く。へえ…人間界つてのはこんなに自然に溢れてるのがっ！やはり人間界は…

「お前たち、余りキョロキョロするんじゃない。まるで田舎者だぞ？」

眼鏡ネステイが俺たちを注意してくる。しゃーねえじゃん。人間界なんて滅多にこれないんだしょー。バルレルも俺の行動を見て「悪魔の品格が下がるからじつとしろ！」と叱咤してくる。なんだよ、そんなに

殺気を撒き散らすなよー。

「あつ、あそこに何かあるわよ?」

トリスちゃんが指をさした方向になにやら建物が…休憩所か?

「ああ、あれは旅行者が休憩するための場所だな。ただ、ああいう所には…」

「おい、ニンゲン。もうあのニンゲンは行っちゃったぞ。」

「おつ、おい。トリス!」

後ろから何か聞こえるが、既にトリスちゃんは建物に向けて走っている。俺はそれについていってるが…いいねえ。イイ感じの空気が流れている。

「変ね。誰もいない…まあいいや。ねえ、ユウキ。ここで一休みつてのはどうかな?」

トリスちゃんが能天気な表情で俺を見つめている。流石トリスちゃん。ここらを包む気配なんて眼中に無しか!カハハ、そりゃいい!

「おつ、いいと思うぞ。バルレルも喜ぶだろう。」

そして俺たちに追いついてきたネステイ眼鏡が一言。

「ふう、まだ旅の始まりだというのにはしゃぎすぎだろう。」

「うっ。」

トリスちゃんは凶星を突かれて引いてしまう。かわいいやつちゃん  
あ。

「後な、一ついい事を教えてやろう。こういう休憩所は旅人にとっ  
ては欠かせない場所である。だが…」

「同時にもっとも油断しやすい場所でもあるってな？」

俺がそういった途端に周囲を取り巻く気配 殺気 どもが姿を現し  
た。トリスちゃんは急な事で頭がついていていない様子。

「ケケツ、こんな殺気にもきづかねえーとは、呆れてモノも言えな  
いぜ。」

「キミ以外はとも、この展開を予想していたようだ。まったく、好  
戦的な奴らだ。いいか、トリス。旅にはこういうのも付き物だとよ  
く覚えておけ。」

「ど、どうするのよ!？」

「そんなの決まってるだろ？」

「こいつらをぶちのめすだけだヨ!！」

俺とバルレルは一目散に野盗へと突っ込んでいった。

「へへっ、なんだガキ共？痛い目にあいたくなかったらさっさと…

ぐわああ！」

手始めに先頭にいたニンゲンから切り刻む。攻撃してくる事を予想していなかったのか抵抗もなく一瞬にして男は気絶した。

「てつてめえ！やりやがったな！」

ニンゲン共は殺気をこちらに向けて襲いかかってきたが…遅すぎるぞ！

キーン！と音を立て俺は持っていた片手剣で襲い来る短剣を弾き飛ばした。俺に腕ごと弾かれた男のがら空きになった胸へと掌底を打ち込む。ニンゲンの身体は俺らの腕力に軽く吹き飛ばされ、他のニンゲンの所へ勢いよく激突した。突然の衝撃に体勢を崩した他のニンゲンの所へ一瞬にして近づき回し蹴りを打ち込み更に吹き飛ばす。一人は更に他の奴を巻き込み、また一人は木に激突したりと。各々が吹き飛ばされた先にて気を失っているのを確認してから次の獲物を探す。

「やるじゃねえか、ユウキ！俺も負けちゃいられねえなああ！」

バルレルはスピードを生かし、敵をかく乱させる。敵がバルレルの姿を見失ったが最後、奴の持つてゐる槍によつて深々と胸に穴を空けられその命は絶たれていった。

打、打、打！ 貫、貫、貫！

20を越す程にいた野盗だが、瞬く内にその数を減らしていった。

「ひつ、ひい！化け物！」

逃げる野盗。逃すほどやさしい俺たちじゃない。

「残念ながら、逃がすわけにやあ…」「ケケツ、さつさと…」

「お前たち、もうやめろ！」

あ？なんだ、あの眼鏡ネステイ…俺たちを止めようってか？いい度胸だ。

「ユウキ、バルレル止めなさい！」

ググウ！？これは…制約かつ！？むぐう…恨むぞ、トリスちゃん。

「そんな目で睨まないの。もういいでしょ？こいつらは役人に渡し  
ましょう。」

むうー！暴れ足りないぞ…。こういうニンゲンを見てるとイライラ  
するんだよなー。アイツはなんのために…

旅立ち? } going my way! } (後書き)

久しぶりすぎてストーリーを忘れてしまった

思い出しながら書いていきます(笑)

## 謝罪

いつも私の小説を読んでくださっている皆様、ありがとうございます。

この度、大スランプに陥ってしまい…小説の続きがかけなくなりしました。

メインであるネギま！の世界でやりたい放題は遅くはなっけてしましますが、続けていく気ではありますが、こちらのサモンナイトの方は打ち切りとさせていただきます。（サモンナイト2のソフトが行方不明になったというのもあります）

こちらの方は更新が余りできていなかったので御覧になっていらっしゃる方は少ないと思いますが、こうしてアップをさせていただいた以上、こうしてお詫びをさせてもらいました。

誠に身勝手な理由でございますが、ご理解の方をよろしく願います。

尽きましては、「書けるのであれば」でございますが別の作品を投稿しようかと思っています。

ある程度書いてみないとわからないのですがね^^；

…書く前にメインを書かないとな…orz

今、メインも書き中なので…頑張りますのでまた応援よろしく願います！ではー！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0676p/>

---

サモンナイト～ロード・オブ・ナイトメア～

2011年9月27日23時21分発行